不屈の開拓農民・山岳画家

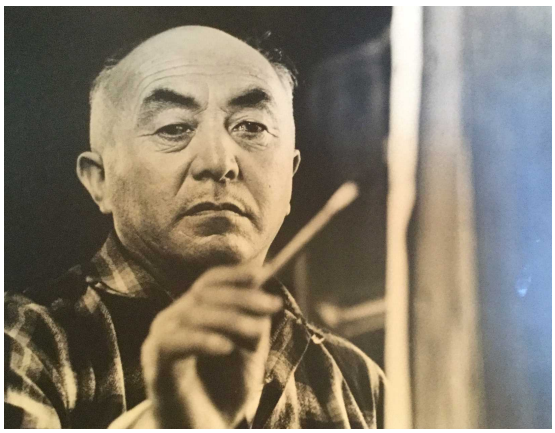
坂本直行

坂本直行は一九〇六年、材木業を営む父の弥太郎、母の直意の次男として現在の釧路市で生まれました。

一九一五年、直行の祖父である坂本直寛が死去し、直寛が経営していた農場の処分のため、坂本一家は札幌に転居しました。直行は、そこで自然に興味をもつようになり、札幌近郊の山々、特に、手稲山に登ってみたいという思いを強くしました。

小学校三年生の登山遠足でその思いは実現し、直行の山への思いは更に強くなりました。

中学時代からスケッチを始め、日曜日ともなれば、近くの山に登っては草花や山の絵を描くなど、直行は子どもの頃からとにかく自然を好んでいました。



〔広尾町海洋博物館蔵〕

父の勧めで北海道帝国大学（現北海道大学）農学部実科に進学した直行は、在学中は山岳部の仲間とともに、北海道の山々を次々に登りました。

大学卒業後の一九三〇年、同じ山岳部の仲間に誘われて、牧場経営をするため、十勝の広尾村（現在の広尾町）に転居しました。当時、札幌から帯広までは汽車で十時間かかる長旅でした。まだ見ぬ牧場に期待と不安を抱えながら、直行は帯広駅に降り立ったのです。

帯広では遥か南西に見えていた日高山脈の姿が、広尾村の農場に近づくにつれ、鮮明に現れてきました。そして、青空にくっきり浮かんだ山の峰の美しい全貌が、直行の心を捉えました。

「自然はなんとすばらしいものか。」

「自然の前では、人間はひとたまりもない。」

牧場の裏山に登ると、そこは日高山脈を一望できる絶好の場所で、直行はよく出掛け、スケッチをしました。

結婚をした直行は、一九三五年、住み慣れた牧場を後にし、翌春から村内の下野塚の原野を開墾することにしました。毎日往復十キロの山道を通い、住居と畜舎を建てるため、雪深い山中で丸太を伐採し、必要な資材をそろえまし

た。

また、開拓地では、木を切り、草を刈り、土を耕し、畑にします。一番大変なのは、うっそうと茂る柏林の抜根で、柏の根は非常に硬くて深く、一本の抜根をするのに一日がかりになるのも当たり前で、気の遠くなるような、過酷な労働が続きました。

直行は、開墾には欠かせない馬を求めました。開拓を諦めて故郷へ帰る馬主から、馬を百円で買ったときのことを、直行は手記にこう記しています。

「ふと振り返ってみると、馬主がぽつねんと馬屋の側に立って他人につれられて行く愛馬に別れを惜しんで佇んでいた。私はふと寂しい気持ちになった。すべての家財を他人に渡し、寂しく開拓途上の原野を去って故郷へ帰る人の心境を思って、思わずほろりとさえなった。これから同じこのヌプカ原野の一隅に開拓の鍬を下ろそうとする自分と、原野を後に再び故郷に立戻るこの馬主の事を考えると、何年かたって又自分も同様な運命に逢うのではなかろうか。」

一介の開拓農民として原野に鍬を下ろしたものの、不安を抱えながら始まった開拓生活の厳しさ、悲惨さは想像を絶するものでした。隙間だらけの家に住みながら、過酷きわまりない酪農と農業の重労働は続きました。

原野を開墾してから二、三年おきに冷害が続いていました。直行が三十五歳の一九四一年、この年は記録的な冷害による大凶作で、一家は食べるものがなく、困窮の極みを味わいました。家畜も人も食べる物がなくなり、芋と大根で年を越しました。それもなくなると糠を団子にして食べ、栄養失調で農作業もままならぬ状態でしたが、耐えるしかなかったのです。

直行は、日々の貧しさから、農場経営に苦しみました。しかし、その苦しみを妻には一切語りませんでした。妻には、土地が肥えていき、開墾が進んでいく様子を喜んでほしかったのです。

直行は一日十五時間以上も働きました。そんな労働の後でも、夕食後、スケッチを整理しました。経済的に苦しい生活の中にありながら、山へ出向き、原野の草花を慈しみ、雄大な日高連峰に憧憬の視線を送り、北海道の自然をモチーフとした風景画や植物画をスケッチし続けました。直行は馬車でよく市街へ出掛け、日高山脈が近づくにつれ刻々と姿を変えていくことに心を奪われ、また、それ

ぞれの植物が多種多様に生きている様子を見て感動を深めていきました。

重労働が延々と続く中、子どもが次々と生まれ、借金がかさみ、幾度も「もう駄目か」と思いました。ただ、こうした中でも、直行は、常に自然の美しさに感動し、原野を愛し続けたのです。強い精神力の中に心のゆとりを忘れずにいた直行は、こう述べています。

「私はだまって*掘立小屋のドアを押し戸外に出てみる。こんな時には自然の美しさは私にとっては何より有難い存在である。木梢を通して見える澄み切った空の色や、碧空に浮き彫りにされた日高山脈の連なりは何よりの*鞭撻者である。」

「初冬の南日高」
〔広尾町海洋博物館蔵〕

一九五六年、一人の小柄な男が豊似の駅に降り立ちました。直行に会うために東京から訪ねてきた武蔵野美術大学教授で、彫刻家の峯孝でした。峯が北海道に来た目的は、北海道の酪農家の顔を彫刻作品にしようというものでした。「いい顔の農家を紹介してほしい。」と酪農協会に協力を求めた結果、直行に白羽の矢が立ったのです。峯は直行に出会うなり、「この顔は彫れる」と感じました。

峯は数日間、直行宅で過ごし、そこで直行の絵を見ました。そして感動しました。絵の一枚一枚に自然を捉える直行の目の確かさと温かさがにじみ出ていました。自然の中で実際に生活した者だけにしか描き得ない色彩がそこにはあったのです。あまりの感動に峯は直行の妻に言いました。

「ご主人の絵はすばらしいものだ。あのままにするのはもったいない。個展を開けるように手配しましょう。」

一九五七年、札幌で「原野と山岳のスケッチ展」が開催されました。絵は飛ぶように売れ、大成功を収めました。直行は反響の大きさに驚くと同時に、自分の絵に自信をもち始めました。

この頃から、直行は自分の進むべき進路について考えていました。これまで、全生命をかけて戦ってきた直行の人生の足跡が刻まれている原野を離れてよそへ行くなど考えも及びませんでした。しかし、現実は厳しく、子どもたちは高校を卒業すると次々と原野を去って行きました。個展

の計画は次々と決まり、直行の妻は、畑仕事をしながら、たくさんの絵を描かねばならない直行の体を案じていました。

ついに直行は決心しました。出て行った子どもたちを呼び集め「百姓をやめる」と宣言したのです。子どもたちは黙って聞いていましたが、直行の鼓動を感じていました。

「百姓はやめたが、俺は負けないぞ！」

直行は原野を開墾した時と同じ馬力で絵を描きました。鍬を絵筆に代えただけで、自然に立ち向かうことに変わりない直行の姿がそこにありました。

その後も北海道の大自然を描き続け、個展の開催も続きました。そして、植物図鑑を携え、草花に寄せる思いをスケッチに表した直行の作品は、帯広市の製菓会社「六花亭」の包装紙となり、全国に知られることとなりました。六十七歳の時には、それまでの活動が認められ、北海道文化賞を受賞しました。

「うこんうつぎ」
〔続 開墾の記（北海道新聞社）より〕

親しみを込めて「ちょっこうさん」と呼ばれた直行は、一九八二年、札幌にて死去しました。七十五歳でその生涯を終えるまで、北海道の自然をこよなく愛し、素朴で大胆なタッチで生涯にわたり北海道を描き続けたのでした。

一九〇六	釧路で生まれる
一九二七	北海道帝国大学農学実科を卒業する（二十歳）
一九三〇	広尾村（現在の広尾町）で牧場を共同経営する（二十四歳）
一九三六	広尾村下野塚に移り、開拓生活を始める（三十九歳）
一九五七	札幌で初の個展を開く（五十歳）
一九六〇	広尾町豊似に移り、画業への専念を目指す（五十三歳）
一九六五	札幌市宮の沢に移る（五十九歳）
一九七四	北海道文化賞を受賞する（六十七歳）
一九八二	札幌で死去する（七十五歳）

＊ぽつねん…ひとりだけで寂しそうにしているさま
＊糠…穀物の皮などを集めた物
＊憧憬…あこがれること
＊掘立小屋…柱を直接土中に埋めて建てた小屋
＊鞭撻…おこたらないようにと強く励ますこと